



『 ぱんだより 』

※パンダからのお便りという意味で「ぱんだより」と名付けました。
 スパークスのアジア地域における情報発信レポート

第54号(2010年5月13日)驚異的な輸出回復の韓国

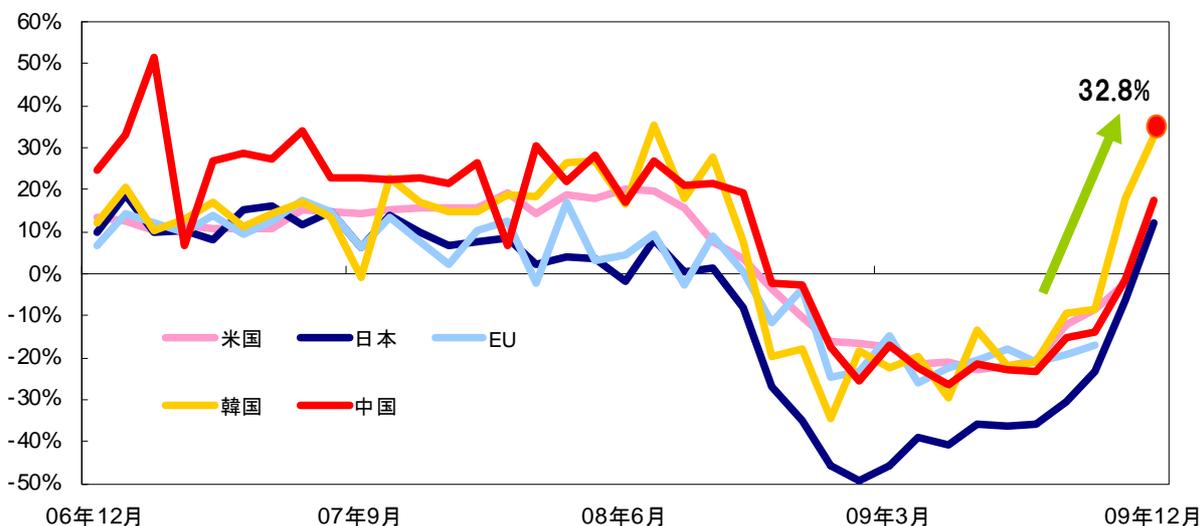


輸出が景気回復を牽引

韓国は2009年の実質GDP成長率が+0.2%と、主要先進国がマイナス成長に陥る中で先行して景気回復しています。金融危機後に韓国の実体経済がいち早く回復した背景としては、危機対応や景気対策に加えて、韓国の貿易の変化があると考えられます。具体的には、新興国向け輸出の比重が高まっていることや、輸出品目を資本・技術集約型の工業製品へシフトしてきたことなどがあります。つまり、韓国は新興国を含めた海外販路を拡大し、貿易構造の高度化を進めたといえます。結果として、世界でも工業大国としての地位を一段と高めています。

下のグラフから分かるように、輸出成長率(対前年比)は主要な国(地域)の中で最も強い回復力を見せており、2008年7月のピーク時のレベルまで近づいてきました。総合電機メーカーのサムスン電子やLG電子など、韓国の輸出産業を代表する企業の業績も非常に堅調で、世界での存在感は益々高まっています。

国別・地域別の輸出成長率(対前年比)



注: 韓国、中国、日本2009年12月まで、米国2009年11月まで、EU2009年10月までのデータ。
 出所: Factset(2010年4月末現在)



本資料は、スパークス・アセット・マネジメントが情報提供のみを目的として作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。また特定の有価証券の取引を勧誘する目的で提供されるものではありません。スパークス・アセット・マネジメントとその関連会社は、本資料に含まれた数値、情報、意見、その他の記述の正確性、完全性、妥当性等を保証するものではなく、当該数値、情報、意見、その他の記述を使用した、またはこれらに依拠したことに基づく損害、損失または結果についてもなんら補償するものではありません。ここに記載された内容は、資料作成時点のものであり、今後予告することなしに変更されることもあります。また、過去の実績に関する数値等は、将来の結果をお約束するものではありません。この資料の著作権はスパークス・アセット・マネジメントに属し、その目的を問わず書面による承諾を得ることなく引用または複製することを禁じます。



『ぱんだより』

スパークスのアジア地域における情報発信レポート

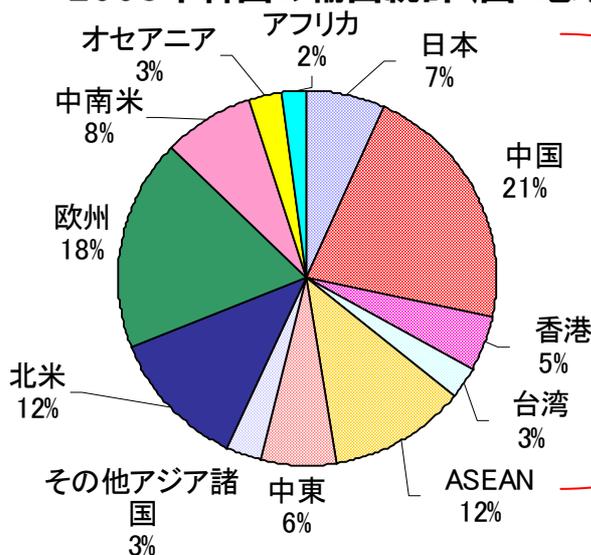


アジア・中東地域での事業拡大

1998年、韓国の輸出総額に占める欧米向けの構成比は40.1%、日本を加えた欧米日の構成比は同49.4%と約半分を占めていました。しかし、2008年にはそれぞれ30%、37%と大きく低下しています。この変化の主な要因としては、隣国である中国の経済成長が考えられます。2003年に韓国の輸出先トップは米国から中国に入れ替わり、韓国の輸入先でも2004年に米中が逆転、それ以降は韓国にとって中国が最大の貿易相手国となっています。1998年と2008年の輸出先構成比を比較すると、中国は9%から21%に高まる一方、米国は17.2%から11%に低下しています。

もちろん、韓国の貿易は中国だけに依存しているわけではありません。2008年においては、アジア・中東全地域への輸出総額は全体の約57%にも上りました。ここ数年急速に成長しているアジア・中東地域の中で、いかに韓国が、文化や地理的な優位性を生かし、同地域の経済成長の需要をうまく取り込んできたかがわかります。

2008年韓国の輸出統計(国・地域別)



アジア・中東地域
における比率

約57%

出所:ジェトロ 2010年4月末現在 スパークス・アセット・マネジメント作成

(編集後記)韓国がアジアへ輸出しているのは「物」だけではありません。韓国ドラマ、音楽などのコンテンツはもちろん、世界で有名な韓国整形技術もアジア隣国に輸出しています。中国の新華網によると、中国の美容整形業界は過去5年間においてGDP成長率を上回る年15%程度の速さで成長しているとのこと、これも韓国にとって大きな市場といえます。

(告られタイ)



本資料は、スパークス・アセット・マネジメントが情報提供のみを目的として作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。また特定の有価証券の取引を勧誘する目的で提供されるものではありません。スパークス・アセット・マネジメントとその関連会社は、本資料に含まれた数値、情報、意見、その他の記述の正確性、完全性、妥当性等を保証するものではなく、当該数値、情報、意見、その他の記述を使用した、またはこれらに依拠したことに基づく損害、損失または結果についてもなんら補償するものではありません。ここに記載された内容は、資料作成時点のものであり、今後予告することなしに変更されることもあります。また、過去の実績に関する数値等は、将来の結果をお約束するものではありません。この資料の著作権はスパークス・アセット・マネジメントに属し、その目的を問わず書面による承諾を得ることなく引用または複製することを禁じます。